

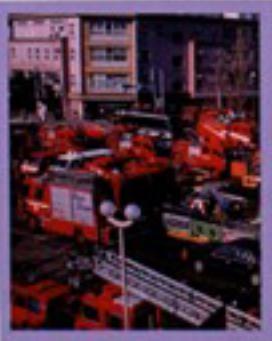
覆水盆に返る

1

はじめに

先の阪神淡路大震災で水の供給が完全に寸断されました。そのため、あらからで火の手があがるなか何もできずにはただ呆然と見ているだけで、しかも生きていくのに必要な飲み水を確保するのに頭痛を抱めました。

目の前には大量的海水があるのに、それを全く利用できない悔しさから、新しい水確保の方法を考えました。



各地方からたくさんの消防車が駆けつけたが被災の“水”がなく、雨が飛沫落ちていいのをただ呆然と眺めているしかありませんでした。

あらためて“水”的重要性を思い知らされた災害でした。



水道は川の水とダムの水がともに約25%で第1位となっているいます。その次が農業水で約22%。そして湖や沼などの水約1、27%とつづいています。つまり水道水のものはほとんどが川の水なのです。東京では利根川や多摩川の水を、大阪府では淀川の水を水道水として使っています。

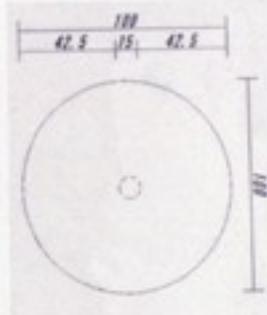
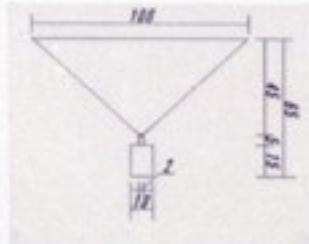
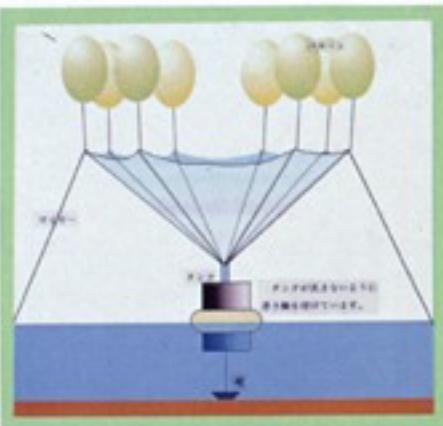


上の写真は、ゴムムシグマシが明け方の露を体に受け、本身を守っている様子です。

私はこの状況に住むゴムムシグマシの写真を見出し、その膜気膜く水を集めている姿に驚きました。このように水を集められないかと考えていたところ、子供が雨日になると元気のを見て、今回の作品を思い浮かべました。

覆水盆に返る

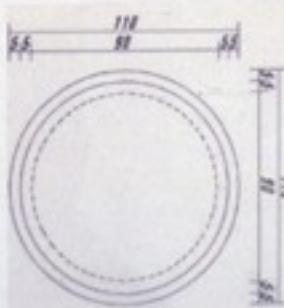
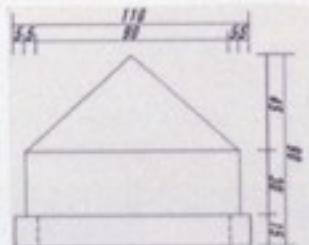
2



これは雨水を回収するための装置です。右図の様に雨水を車の内面で受け取り、海面に浮かぶタンクに回収されます。

単位/mm

これは、車と水槽を使い複型を作ったものです。実際には雨水と蒸留水を回収できました。



これは蒸留水を回収するための装置です。右図の様に海面から蒸留した水が内面に付き、ワイヤーをつけてタンクに回収されます。

単位/m

車の上部には幾つものバルーンがあります。車の形を維持しています。また、ワイヤーで車と薄板を結んでいます。タンクが流れない様にするために、底を沈めています。タンクは動で回収します。

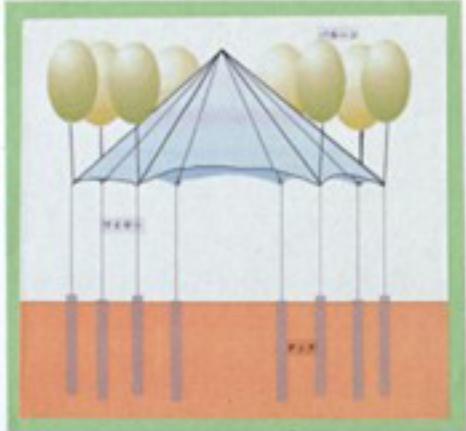
台風などの強風が吹いた場合は、バルーン内のヘリウムを抜き、薄板にクラゲの様に浮かばせます。その際ワイヤーはつなげたままになります。

これらの装置は、どこにでも移動することができます。

覆冰盆に返る

解説
これらの装置は、氷で
の覆氷に挑戦します。

- 一見普通の水桶
が複数個並んで
います。
- パッケージは、
最初の水桶を
覆う形です。
- リップー、
水桶の浮かぶ場
所に固定アタッチメント。
マグネットー、
複数水桶に掛
けるマグネット。



これは、砂漠から基盤する水蒸気を回収するための装置です。水蒸気が車の内面に付く、ワイヤーをつたってタンクに回収されます。

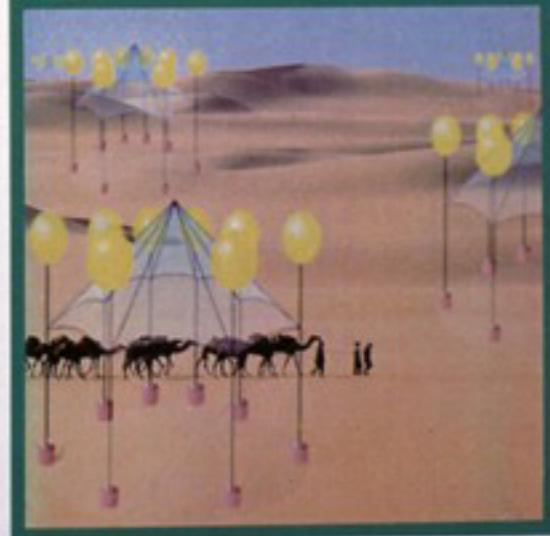
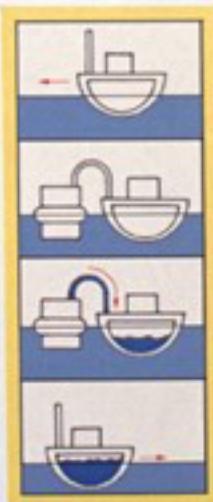
タンクは、舟の形になっていて、いつでも汲み上げ事が出来、誰でも利用できるようになっています。

この装置は、どこにでも移動することが出来ます。

これら2つの写真は実際には設置したときの様子です。この海の沿岸は世界各地に水を供給するために設置してあります。この地域のように海が穏やかで、空気がかつ風の少ない所に設置します。

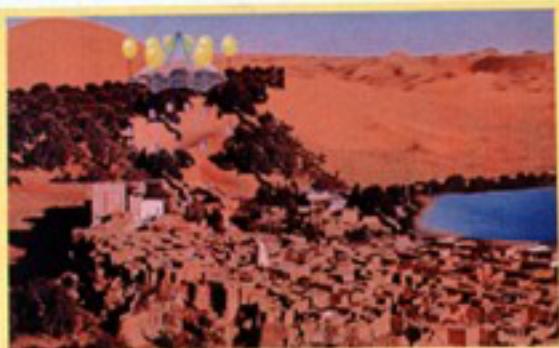
この砂漠の装置は本当に水の少ない所に住む人達が使うために設置してあります。身からんの基盤水を回収するので、海に近い所に設置します。住人や旅人、どんな人でも使うことができます。

水を回収している図



覆冰盆に返る

4



このようにまわりに樹木を増やし、砂漠化を阻止して緑化を進めています。タンクから集落の上にまでつながった地下のボンプは、大きなオアシスを作り上げました。今世界で大問題になっている地理温暖化と砂漠の根本を防いでくれます。



海で採取した水は、世界各地に運ばれます。この町にも水が運ばれ、人々は飲料水として、また災害時のための水としてこのタンクに水を貯蔵しています。このタンクは簡単な地盤をつくるだけで、あらゆる所に設置が可能でビルの屋上や山の中などでも容易です。

まとめ

この発明を使って頂立水は、世界各地で飲料水、精製水、工場用水などに利用されます。また、砂漠の緑化を進める同時に、地理温暖化によるCO₂の埋め戻しも行います。最後に、我々人間にとって必要な不可欠な水ですが、砂漠に住む人は、簡単に水を手に入れることができます。日本で暮らしていることは事実です。この問題を解決するためにも、みなさんに少しでも注目してほしいと思います。